

# 摯虞『決疑要注』をめぐつて

佐藤達郎

## はじめに

西晋、摯虞の編にかかる『決疑要注』一卷は、『隋書』経籍志では儀注篇に分類され、漢魏時代の職官と礼制に関わる注解書、いわゆる儀注書として唐代に至るまで広く読まれたものらしく、唐宋の類書に多くの佚文を見いだすことができる。本稿は、摯虞による『決疑要注』執筆の経緯と、その内容の検討を通じて、漢代の職官書から魏晋時代のそれらへの展開を跡づけるとともに、魏晋時代における官制と礼制をめぐる意識の、一側面を窺おうとするものである。

## 1 泰始礼の編纂と摯虞『決疑要注』

摯虞（？～三一三頃）は西晋時代の文学者、礼学者として名高く、文学者としては「思游賦」などの詩作の他、詞華集・文学理論書『文章流別集』の編者としても知られる。<sup>(1)</sup> 若い頃には博学の哲学者・歴史家の皇甫謐に師事し、ま

たやはり博学者かつ博物学者として『博物志』などの著を残した張華の門人でもあった。張華との関係については後に再び触れるが、「摯虞・束皙等、並びに載籍を詳覽し、多く舊章を識り、秦議觀る可く、文詞雅贍たり、博聞の士と謂うべきなり」(『晋書』本伝史臣曰)と評される当代随一の博学者としての摯虞の学問は、これら先学の影響に多分によるであろう。<sup>(2)</sup>

『決疑要注』の成立について、『晋書』礼志上には次のように記される。

晉國の建つるに及び、文帝又た荀顗に命じて魏代の前事に因り、撰じて新禮を為り、今古を參考し、其の節文を更めしむ、羊祜・任愷・庾峻・應貞並びに共に刊定し、百六十五篇を成し、之を奏す。太康の初め、尚書僕射朱整、奏して尚書郎摯虞に付して之を討論せしむ。虞、宜しく損増すべき所を表して曰く、……虞、新禮を討論し訖り、元康元年を以て之を上る。陳ぶる所は惟だ明堂五帝・二社六宗及び吉凶王公制度のみ、凡そ十五篇。詔有りて其の議を可とす。後、虞、傅咸と其の事を續續するも、竟に未だ成功せずして中原覆沒す、虞の決疑注は是れ其の遺事なり。江左に逮び、僕射刁協・太常荀崧、舊文を補緝し、光祿大夫蔡謨、又た其の事を踵修すと云う。

やや補足して説明すれば、次の通りである。二六五年の魏から晋への王朝交替に際して、漢代以来、累加を重ねてきた雑然とした法体系を整備すべく、刑法典「律」と行政法典「令」の二種を主体とする法典、いわゆる泰始律令が編纂・發布された。律と令とを基軸とする法体系は、その後の中国法の基調をなすのみならず、東アジアの法体系にも大きな影響を与えることになり、法典編纂の歴史上、泰始律令の持つ意義はきわめて大きい。<sup>(3)</sup>この泰始律令と同時に勅命により編纂されたのが「新礼」百六十五篇であり、荀顗以下、羊祜ら大官たちの参与のもと、吉・凶・賓・軍・嘉の「五礼」の体系を備えた礼典がはじめて成立した。<sup>(4)</sup>『晋書』武帝紀にも「(咸熙元年)秋七月、帝(受禪前の司

馬炎)、司空荀顗を奏して禮儀を定めしめ、中護軍賈充は法律を正し、尚書僕射裴秀は官制を議し、太保鄭沖、總じて焉を裁る」とあるように、行政法典、刑法典と同時に礼典が編纂されたことは、この三者が相まって国家の体制の根幹を形作るという、為政者たちの明確な認識を示すものであろう。

この礼典の成立から約一五年後、太康年間(二八〇—二九〇)のはじめ、摯虞らに礼典の内容を審議する勅命が下り、元康元年(二九一)、摯虞はその結果、整理刪改する必要がある箇所を十五項目にわたって上奏した。『晋書』礼志から、それら各項目の概要を確認することができる(その一部は3章で紹介する)。さらにその後、彼は傅咸とともに、また傅咸が元康四年に没した後は一人で、儀礼の細節に至るまでの考証作業を続け、彼が西晋末期の動乱の中で餓死した後、東晋時代の学者たちがその遺業をまとめ、さらに摯虞の後の議論をも追加して成ったのが、『決疑要注』である。なお、摯虞とともに考証に携わった傅咸が「剛簡有大節、風格峻整」と評される正道派の官僚であり、また「咸累自上稱引故事」と言われるように故事律令に明るい学者でもあったことは、『決疑要注』の性格にも影を落としているように思われるので、ここで付言しておきたい。彼の当時の官銜は司隸校尉であり、狹義の礼官ではないが、それにも拘わらず彼がこうした作業に参加したのは、個人的な意向によるものであったに違いない。

『決疑要注』が泰始礼の検討に際するいわば副産物としての、個人的(官撰ではない)著作であったことを以上確認したが、後に具体的に見るように、それは礼典の各儀節の根柢、意味、歴史的由来を説明した、一種、考証学的内容を持つものであったと見られる。元康元年の上奏に「所陳惟」とあるように、このときは国家祭祀と吉凶の礼制のみにしか及んでいなかった検討を、さらに学制、服制、殿堂の制、廟制、等々の委節に至るまで考論しようとしたものが同書であったと考えられる。『決疑要注』の書名がもとのものであったかは分からない(『宋書』礼志では「決疑」、『南齊書』礼志では「決疑注」とし、『隋書』經籍志に至って初めて「決疑要注」の名が確認される)が、儀

節上の疑わしき点につき、その由来・根拠を經典・故事に徴して考証し、旨要を注解するという同書の性格を、この表題は的確に表しているであろう。

『決疑要注』がいつの頃まで単行本として通行していたか正確には言えないが、『新唐書』芸文志（儀注類）に「摯虞決疑要注一卷」、『通志』芸文略（礼儀類）にも「決疑要注一卷 摯虞」とあり、唐宋の頃までは一卷の整本として流通しており、その後、散逸したらしい。明の陶宗儀は同書を輯佚し『說郛』に収めたが、六項目の各条文とも出処が不明で節略が多く、かつ十分に佚文を集めていないなど、問題が非常に多い。それに対し民国期の張鵬一は『摯太常遺書』（『関中叢書』所収）巻二に『決疑要注』を輯佚し、出典を明記した上で十数項目の佚文を集める。『說郛』の輯本に比べれば大幅に信賴が置けるが、『芸文類聚』の佚文を収めず、『初学記』の佚文をよく見ていない（たとえば下述（c）の佚文を収めない）など、依然問題を残す。また項目ごとの佚文の分類にも、やや妥当性を欠くと思われる箇所が散見される。そこで次に、改めて諸書より佚文を集め、初歩的な整理を加えて提示することにする。

## 2 『決疑要注』佚文

以下、諸書から集めた決疑要注の佚文を、同一ないし一続きの内容と見られる文ごとに分類して掲げる。複数の典籍にほぼ同一の文が載せられる場合は、最もまとまったテキストを提示し、大きな異文のみ併記する。輯佚という作業の性質上、訓読はあえて加えない。引用文は旧字体を使う。『文選』は『文』、『北堂書鈔』は『北』、『初学記』は『初』、『太平御覽』は『御』と略記する。

(a) 流蘇の制

天子帳以流蘇為飾。凡行為流蘇。（『北』一三二）／凡下垂為蘇。（『文』三・張衡東京賦李善注）

(b) 玉珮の制

漢末喪亂、絕無玉珮。魏侍中王粲識舊珮、始復作之。今之玉珮、受法於粲也。（『三国志』二一王粲伝注）

(c) 尚書台の文字の制

尚書臺召人、用虎爪書、告下用偃波書、皆不可卒學、以防矯詐。（『初』二一）

(d) 廟主の制

凡昭穆、父南面、故曰昭。昭、明也。子北面、故曰穆。穆、順也。始祖特於北、其後以次夾始祖而南、昭在西、穆在東、相對。（『統漢書』祭祀志劉昭注）／毀廟主藏廟外戶之外、西牖之中（『初』一三作「凡廟之主藏于戶外北牖之下」）。有石函、名曰宗祏。函中有筭、以盛主。親盡則廟毀、毀廟之主藏于始祖之廟。一世為祧、祧猶四時祭之。二世為壇、三世為墀、四世為鬼、祫乃祭之、有禱亦祭之。祫於始祖之廟、禱則迎主出、陳於壇墀而祭之、事訖還藏故室。迎送皆蹕、禮也。（『統漢書』祭祀志劉昭注）／古者、帝王出征、以齊車載遷廟之主及社主以行、故尚書甘誓曰、用命賞于祖、不用命戮于社。秦漢及魏、行不載王（當從『御』五三一引佚文作「主」）也。（『御』三〇六）

(e) 朝会の制

漢制、正會於建始殿、晉制、大會於太極殿、小會於東堂。其會則五時朝服、庭設金石、虎賁旄頭、文衣繡尾。〔御〕五三八；〔芸〕四九もほぼ同／讌之與會、威儀不同也。會則隨五時朝服、庭設金石懸、虎賁着旄頭、文衣繡尾、以列陛。讌則服常服、設絲竹之樂、唯宿衛者、列伏。大會於太極殿、小會於東堂。〔御〕五三九／漢末喪亂、絕無金石之樂。魏武帝至漢中、得杜夔、識舊法、始復設軒懸鍾磬、至于今用之。〔芸〕四一

(f) 朝堂の制

凡太極殿乃有陛、堂則有階無陛也。右碱左平、平者以文塹相亞次、城者為陛級也。九錫之禮、納陛以登、謂受此陛以上殿。堂之正者為路寢。凡殿堂坐位、以近尊為上、無尊者則已、東向者以北為上、南向者以西為上、西向者以南為上、北向者以東為上也。殿堂之上、唯天子居牀、其餘皆鋪幅席、席前設筵。凡天子之殿、東西九筵、南北七筵。〔御〕一七五／在殿堂之上、惟天子居牀、其餘皆鋪席、前設筵几。天子之殿、東西九筵、南北七筵。故曰、度堂以筵、度室以几也。禮、堂上接武、堂下布武。一曰〔\*〕、堂上遂於百里、堂下遂於千里、門庭遂於萬里。〔初〕二四

〔\*〕「一曰」以下は他書に同様の佚文が見えず、決疑要注からの引用ではないかもしれない。

(g) 朝会執贄の制

古者朝會皆執贄、侯・伯執圭、子・男執璧、孤執皮帛、卿執羔、大夫執鴈、士執雉。漢・魏粗依其制、正旦〔通典〕七〇作正朝〕大會、諸侯執玉璧、薦以鹿皮、公卿已下所執如古禮。古者衣皮、故用皮帛為幣。玉以象

德、璧以稱事。不以貨沒禮、庶羞不踰牲、宴衣不喻祭服、輕重之宜也。（『続漢書』礼儀志）

（h）衾冕の制

秦除衾冕（『御』六八六作「六冕」）之制、唯為玄衣絳裳一具而已。漢興亦如之。中興後、明帝永平中、使諸儒案古文、依圖書、始復造衾冕之服、至于今用之。（『御』六九〇）／中興後、明帝永平中、使諸儒案古文、依圖書、始復造衾冕、火龍黼黻、以奉祀郊廟。（『北』二二八）

（i）博士弟子之制

漢初置博士而無弟子、後置弟子五十人、又增滿五百、漢末至數千人。魏之務學（者、始詣太學為門人、二歲）通二經者、補文學掌故、滿三歲、通三經者、擢為太子舍人。（『御』五三四；「」内は割注）／太常弟子、通二經、補文學、三經、補太子舍人。晉置十六人、掌表啓。（『御』二四六）／太子舍人、晉置十六人、掌表啓也。（『北』六六）／漢末弟子五千人、與博士習禮儀。弟子滿二歲、通二經者、補文學掌故。魏時、募學者好誦大學為門人、滿三年、通一經者、稱弟子。（『北』六七）

（j）某祭（\*）の制

（禘（\*））豊於四時之祭、而約於禘祫之祭。（『北』九〇）

（\*）孔広陶の『北堂書鈔』校本では豊上に禘字を補うが、それでは文意に矛盾をきたす。この文は禘祭とは別の某祭について述べたものと解するべきである。

(k) 髦頭の制

世祖曰、髦頭之義、何謂邪。彭權曰、國有奇恠、觸山截水、無不崩潰、難畏髦頭マ、故使虎士服之、以衛至尊也。張華對世祖曰、臣以為、壯士之怒、髦湧衝冠、義取于此也。〔北〕一三〇／晉武帝時、彭權為侍中、帝問侍臣、旄頭之義何謂邪。權對曰、秦紀云、秦國有奇恠、觸山截水、無不崩潰、唯畏旄頭、故使虎士執之、以衛至尊。〔御〕二一九

(l) 喪服の制 (1)

禮、故臣為舊君齊衰三月、謂策名委質稱臣吏者也。見察舉而不為吏者、弔服加麻。〔御〕五四七

(m) 喪服の制 (2)

禮、臣喪其父母、則赴於君、君弔之。漢太傅胡廣喪母、天子使謁者、以中牢弔祭、具送葬。魏司空陳群喪母、使者弔祭如故事、又使黃門侍郎杜恕、奉詔慰問。〔芸〕四〇／凡使弔祭、同姓者、素冠幘、白練深衣、器用皆素。異姓者、服色器用皆不變。〔通典〕八一・八三

(n) 喪服の制 (3)

古者、男子皆衣綵、有故乃素服。秦漢以來、服色轉變、令唯朝廷五服用綵マ。〔御〕八一四



(o) 喪服の制 (4)

父亡、服竟、繼母還前親子家、當為何服。此有問、「有夫婦生男女三人、遭荒亂離散、不知死生。母後嫁、有繼子。後夫未亡、得親子信、請就親子家、後夫言可爾。後數年、夫亡、喪之如禮、服竟、隨親子去、別繼子云、「我則為絕、死不就汝家葬也。」而名戶籍如故。母今亡、繼子當何服。服之三年則不來葬、服之周則無所嫁。」博士淳于睿等以為、當依繼母嫁、從為服周。博士孫綽議曰、「父答雖有可爾之語、夫妻枕席相順之意、固非決絕之辭也。繼母喪父如禮、服竟之後、不還私家、踰歲歷年、循養無二、母恩不衰。適見親子、專自任意、無所關報、私隨其志、絕亡夫、背繼子、違三從正義、亦為大矣。今母雖不母、子何緣得計去留輕重而降之哉。夫五服有名、不可謬施。施之為出、出義不全。施之於嫁、嫁義不成。欲降服周、於禮何居。名在夫籍、私歸親子、喪柩南北、禮律私法、訂其可知、便決降服。許令制周、頗在可怪。」博士弟子北海徐叔中難孫云、「以前問不立甲乙為名稱、於議不便。今以母為甲、先夫為乙、後夫為丙、先子為丁、繼子為戊。丙言可爾、必慮事宜、順其至情、非虛欺也。臨終不命、知死之後、制不在己故也。甲不重求、信之前言也。本有求還之計、去誓不還葬之辭。生則己不得養、死則不與己父同穴、就不成嫁、當為去母、附之於嫁、不亦宜乎。」(『通典』九四)

(p) 發哀の制

國家為同姓王・公・妃・主發哀於東堂、為異姓公・侯・都督發哀於朝堂。(『通典』八一)

(q) 王公の簡冊への記名の制

尚書名王公及位班王公者、皆用尺一。(『北』七〇)

(\*) 孔広陶の校本では尺一の下に六字を補うが、これでは文意が通じない。校訂の案語が誤入したものであろう。

(r) 日蝕に際する齋戒の制

凡救日蝕者、著赤幘、以助陽也。日將蝕、天子素服避正殿、内外嚴警。太史登靈臺、伺候日變、便伐鼓於門。聞鼓音、侍臣皆著赤幘、帶劍入侍。三臺令史以上皆各持劍、立其戸前。衛尉卿驅馳繞宮、伺察守備、周而復始。亦伐鼓於社、用周禮也。又以赤絲為繩以繫社、祝史陳辭以責之。社、勾龍之神、天子之上公、故陳辭以責之。日復常、乃罷。(『晋書』礼志上)／(前段とほぼ同文を引いた上で)此義、按晉摯虞決疑注云、約魯昭公時叔孫昭子說天子救日之法。(『通典』七八)

以上、筆者の確認し得た十八項の佚文を示した。これらはもとより便宜的な区分であり、たとえば(e)、(f)、(j)は朝会とそれに付随する制度として一連の内容を構成した可能性もある。(l)から(o)ないし(p)についても同様のことが言えよう。また輯佚に当たって史料搜索を尽くしておらず、見落とした佚文のあろうことも無論否めない。<sup>(補注)</sup>しかし、ここに挙げた諸例から、『決疑要注』の内容的傾向や特徴をある程度うかがうことは可能であろう。

### 3 『決疑要注』の内容的傾向

#### (1) 『決疑要注』と經典・故事

『決疑要注』に現れた摯虞の典制に対する基本姿勢をうかがう上で、先に触れた、彼の泰始新礼に対する十五条の検討意見がよく彼の考えを表出していると思われるので、次にそれらの中からいくつかの例を挙げたい。

(イ) 魏氏のご故事、國に大喪有らば、群臣凶服し、帛を以て綬囊と爲し、布を以て劍衣と爲す。新禮、傳に「喪を去れば佩びざる所無し」と稱せば、明らかに喪に在りては則ち佩無きを以て、更めて制して齊斬の喪には劍綬を佩びず。摯虞以爲らく、「周禮、武賁氏、士大夫の職なり、皆な兵を以て王宮を守り、國に喪故有れば則ち衰葛にて戈楯を執りて門を守り、葬なれば則ち車に従いて哭す。又た、成王の崩するや、太保、諸大夫に命じて干戈を以て内外警設せしむ。明らけし喪故の際、蓋し宿衛の防を重んず。喪を去れば佩びざる所無し、とは服飾の事を謂い、防禦の用を謂わず。宜しく新禮を定め布衣劍は舊の如くし、其餘は新制の如くすべし。」と。詔して之に従う。

(ロ) 漢魏のご故事、將に葬らんとせば、吉凶鹵簿を設け、皆な鼓吹を以てす。新禮、禮に吉駕導從の文無く、臣子は宜しく其の衰麻を釋き以て玄黃を服すべからざるを以て、吉駕鹵簿を除く。又た、凶事に樂無く、八音を遏密せば、凶服の鼓吹を除く。摯虞以爲らく、「葬に祥車曠左有り、則ち今の容車なり。既に葬れば、日中に反虞

し、神を逆えて還る。春秋傳に、鄭の大夫公孫蠆卒し、天子、大路を追賜し、以て行かしむとあり。士喪禮に、葬に稿車乗車有り、以て生の服を載すとあり。此れ皆な唯だに柩を載するのみならず、兼ねて吉駕有るの明文なり。既に吉駕を設れば、則ち宜しく導従有り以て平生の容を象り、死を致さざるの義を明らむべし。臣子の哀麻は身が為に釋くを得ざるも、以為らく君父なれば則ち可ならざる無し。顧命の篇、以て之を明らむるに足る。宜しく新禮を定め、吉服導従を設くること舊の如くし、其の凶服鼓吹は宜しく除くべし。」と。詔して之に従う。

(ハ) 漢魏の故事、大喪及び大臣の喪に、紼を執る者、輓歌す。新禮に以為らく、輓歌は漢武帝役人の勞歌に出て、聲哀切なれば、遂に以て送終の禮と為す。音曲摧愴なると雖も、經典の所制に非ず、禮に銜枚を設くるの義に違ふ。方に號慕に在れば、宜しく歌を以て名と為すべからずと、除きて輓歌せず。摯虞以為らく、「輓歌は倡和に因りて摧愴の聲を為す、銜枚は哀を全うする所以なれば、此れも亦た以て衆を感ぜしむ。經典の所載に非ざると雖も、是れ歷代の故事なり。詩に稱するく『君子歌を作し、推して以て哀を告ぐ』と、歌を以て名と為すも、亦た嫌う所無し。宜しく新禮を定むること舊の如くせん。」と。詔して之に従う。

いずれの例も、秦始新禮で經典の記載に従つて削除された漢魏の故事に対し、摯虞が改めて經典解釈および故事に則つて存続を主張し、その意見が裁可されたものである。(イ)の事例では「伝」(『礼記』間伝)の記載に拠り服喪中の佩劍を禁じた新札に対し、摯虞は『周礼』(夏官旅賁氏)や『尚書』(顧命)をも引きつつ同伝を服喪中の佩劍を必ずしも禁ずるものではないと解し、魏の故事に倣つて質素な布帛の劍衣を用いることを説く。また(ロ)では凶事に際する吉駕を、礼典に明文なしとして廃止する新札に対し、摯虞は「春秋伝」(『左伝』襄四)、『儀礼』士喪礼、『尚

書『顧命に根柢を見いだして、その旧來通りの存続を主張する。さらに（ハ）では、大喪での挽歌を漢武時の勞役人夫に出ずるものとし廢止する新札に對し、摯虞は確かに經典には記載がないものの、人心に合し、「歷代の故事」でもあり、かつ『詩』（小雅四月）に説く歌の主旨にも叶うとして、その存続を説く。これらのように、彼は漢魏の故事を重んずる一方で典制の根柢を複数の經書に広く求め、時にその意を敷衍しつつ、常識的節度の上に故事と經典との調和を図ろうとするのである。その点、彼は原理主義的な革新派であるよりは保守的な傳統主義者であつたということになろう。興善宏氏は文学理論に見られる彼の姿勢を「古典的正統主義への志向」と呼んだが、礼制に關してもそうした志向は底流していたと見られる。ただ、彼の傳統主義は決して漫然とした旧説の墨守の上に立つものではなく、むしろ典拠を博引し、ときに拡大解釈をも伴いながら積極的に展開されたものであつたことに、ここで注意しておきたい。彼は杜預に宛てて喪制を論じた書簡の中でこうも述べている。「制を變じ理を通じ、將來に垂典せん、何ぞ必ずやこれを古に附し、老儒をして争いを致さしめんや」（『晋書』本伝）。「老儒」らの硬直した旧説に拘らず、代々の制度の転変を通じて不變の「理」を求め、その意を今に生かすとともに將來に伝えることに、彼の本意があつた。このような彼の思想の背後には、当時の社交界を風靡した浮華の風、國家と社會の崩壞への危機意識が強く働いていたと考えられるのであるが、その点については後述したい。

彼のこうした傳統主義的傾向を、我々は『決疑要注』の中にも容易に見て取ることができる。先章であげた諸佚文を見れば、經典の古制とともに、前代とりわけ漢魏の故事がそれらの中で重きをなして扱われていることは明らかである。たとえば（g）朝会執贄の制においては、「古者」として古制が挙げられる一方、それに基づく漢魏の制度が述べられ、また（h）袞冕の制では秦以來、前漢を経て後漢以後現在に至るまでの制度の沿革が詳説される。以前、筆者が後漢・胡広の『漢官解詁』について論じた際、そこに漢制を歴史的・実証的に考証しようとする、換言すれば

制度の根柢を經典の世界よりは歴史的堆積に求めようとする傾向の強いことを指摘したが、同様の傾向を『決疑要注』(b)、(e)や(i)についても認めることができよう。

彼はこうした考証的作業を単なる知的遊戯として行つたのでは無論ない。(b)、(e)、(h)、(n)で制度の転変の後に「今」制が述べられるように、これら歴史的叙述の畢竟の目的は、現在の制度の根柢と意味を説くにあった。その点では(c)も同様である。彼にあつて現・西晋王朝の制度こそは、西晋末の天下土崩への渦中であれば一層、その由緒を經典と歴史的先例によつて確かなものとし、今にあつてその本来の光輝ある姿に戻すとともに後代に伝える必要があつたのである。事実、西晋の最末、懷帝が戦乱で久しく廢れていた郊祀を挙行した時のこと、摯虞は太常として「舊典を考正し、法物粲然たり」(『晋書』本伝)という。彼の泰始新礼に対する検討意見の一つをまたここで挙げよう。

(二) 漢魏の故事、王公群妾の夫人に見うるや、夫人は答拜せず。新禮に以為らく、禮に答えざる無しと、更めて制して妃・公侯夫人は妾に答えて拜す。摯虞以為らく、「禮に、妾の女君に事うるや婦の姑に事うるが如く、妾の女君に服するや期、女君の報ぜざるは、則ち敬は婦と同じきも又た賤を加うればなり。名位同じからざれば、本より酬報無し。禮に答えざる無しとは、義、此を謂わず。先聖、嫡庶の別を殊にし、以て陵替の漸を絶てり。其の防を峻明にするも、猶お僭違有り。宜しく新禮を定め、自ら其の舊の如くせん。」と。詔して其の議を可とす。

「陵替の漸」「僭違」に対する鋭い危機意識、それに対する、礼的差等を設けての防遏の主張は、当時の浮華の徒らに代表される風教の頹廢を背景として、一層その立ち位置を鮮明にするであろう。先にも触れたように、摯虞とともに『決疑要注』の考証に携わつた傅咸が、父の傅玄と同じく朝野の綱紀肅正を叫び実行した、硬骨の正道派——いわゆる

「礼教の徒」であつたこと、さらに傅咸・摯虞ともに官箴を残していること（摯虞「尚書箴」『北』五九、傅咸「御史中丞箴」『御』一二六）からも、礼教の弛緩に対して彼らが立場を共有したことが推測される。

このように『決疑要注』における事物の考証は、机上の学術議論ではなく、第一に礼楽の崩壊に向かう世にあつての経世の営みであつた。そうでなければ、摯虞らが晩年に至るまで同書の作業に注いだ心血を理解することは難しいであらう。

## (2) 『決疑要注』と談辯

事物の縁起に関する『決疑要注』の説明として、興味を引かれるのは（k）の例である。西晋の武帝はあるとき、天子の行列の先驅をなす、逆立てた髪をかたどつたかぶり物を身につけた儀仗兵「髻頭」の由来について侍臣らに問うたところ、侍中彭權は「秦国」の怪物に縁起を求め、対する張華は、壮士の怒髪をかたどつたものと解した、という。『決疑要注』のこの一条は『宋書』礼志でも言及されている。

晉武嘗て侍臣に問うらく、「旄頭は何の義なるや。」と。彭、推して對えて曰く、「秦國に奇怪有り、山に觸れ水を截てば崩潰せざるは無し、唯だ旄頭を畏るれば、故に虎士これを服す、則ち秦制なり。」と。張華曰く、「是の言有れども事、不經なり。臣謂えらく壯士の怒るや、髪踊りて冠を衝く、義、此に取るならん。」と。摯虞の決疑は是非する所無きなり。徐爰曰く、「彭・張の説、各おの意義を言うも、承據する所無し。……」と。

徐爰、沈約の見たテキストでも、議論の顛末は記されていなかったのであらう。彭權の持ち出した説話を張華は「是の言あり」と認めており、世間では知られた話柄であつたらしい。荒唐無稽な説話を「不經」と退ける張華の説も、劉宋随一の礼学者であつた徐爰から見れば、彭權のそれと同じく根拠を欠く推測に過ぎなかつた。摯虞はやはり碩学

らしく両者の是非については判断を保留しており、鄧国光氏はそれを師である張華への遠慮ゆえと解するが、敢えて「不経」の説、それをめぐる議論を記録にとどめたことの背景に、当時、こうした事物の縁起や意味につき士人間、さらには皇帝と臣下との間で盛んに問答が交わされていたことが想定される。摯虞自身、次のように伝えられる談辯（清談）の担い手であった。

東平の太叔廣、清辯に樞機たり、廣の談ずれば虞、對うる能わず、虞の筆すれば廣、答うる能わず、更も相い嗤笑し、世に紛然とすと云う。（『晋書』本伝）

摯虞自身の関わった、典礼の由来に関する談辯の例として、次のような話がある。

武帝嘗て摯虞に三日曲水の義を問うに、虞對えて曰く、「漢の章帝の時、平原の徐肇、三月初を以て三女を生むも、三日に至りて俱に亡かる、邨人以て怪と為し、乃ち招撫して水濱に之き洗祓し、遂に水に因りて以て觴を汎ぶ、其の義、此に起る。」と。帝曰く、「必ずや所談の如くんば、便ち好事には非ず。」と。暫、進みて曰く、「虞は小生にして、以て知るに足らず、臣請うらくは之を言わん。昔、周公、洛邑を成し、流水に因りて以て酒を汎ぶ、故に逸詩に云う『羽觴、波に隨う』と。又た秦の昭王、三日を以て河曲に置酒し、金人を見て水心の劍を奉じ、曰く、『君をして西夏を制有せしめん。』と。乃ち諸侯に霸たり、此に因りて立てて曲水と為す。二漢相い緣り、皆な盛集と為す。」と。帝大いに悦び、暫に金五十斤を賜う。（『晋書』束皙伝）

これと同じ話は、いわゆる志怪小説である梁・吳均の『続齊諧記』（『文選』四六、顏延之「三月三日曲水詩」李善注所引）にも見える（なお、既にそれより早く南齊・臧榮緒の『晋書』佚文（『御覽』一五八）にも同文が見えるので、現行『晋書』が『続齊諧記』の記事を採録したのではなく、共通の話柄を一方では臧氏『晋書』とそれに基づく現行『晋書』が、一方では『続齊諧記』が採録したものと推測される）。こうした巷間の俗話や、荒外迂誕の説に至



るまで広く材を取り、事物の起源を説こうとする姿勢は、応劭『漢官儀』に既に見られた傾向に連なるものであるとともに、摯虞自身が関わった当時の談辯の風を色濃く反映したものであった。牟潤孫氏は、六朝期における談辯の、社会文化から政治制度に至るまでの広範な影響を指摘したが、『決疑要注』もそうした当時の知的環境の産物であったことを、以上から指摘できよう。

談辯との関係でいえば、『通典』に引く(○)の佚文にも注目せねばならない。遭乱により元の夫子と離別し再婚した女性が、再び元の夫の許に帰した場合、再婚先の継子が彼女のためにいかなる服喪を行うかを問う設問に対し、博士淳于睿・孫綽、博士弟子徐叔中らが議論の応酬を行う内容である。複雑な状況を想定した設問は、西晋末期の戦乱下の情勢をリアルに写したものに違いないが、また敢えて議論を導くために設けられたものでもある。「此有問」なる問いかけに対し博士らが意見を交わしており、これは現実の政策審議に際する礼官の集議のたぐいであるよりも、学官らの集う講学場で催された討論に基づく記録と考えられる。知的議論を楽しむ談辯の影響が公的な礼学討論の場にも及んだこと、その記録が『決疑要注』にも取り込まれていることを、ここから推測することができる。因みに孫綽は孫楚の孫、『晋書』本伝によれば太学博士となったのは征西將軍庾亮の参軍を経た後なので、東晋時代の人に属する。摯虞の死後、東晋の学者が補筆整理した際に追加されたものであろう。

なお、先述のように曲水の義に関する摯虞らの問答が『続齊諧記』にも見える話であるとなると、換言すれば摯虞の議論と志怪小説との接点を想起すると、『説郛』が『決疑要注』佚文として輯録する次の出所不明の文章にも注意せねばならない。

(s) 漢武鑿昆明池、極深、悉是灰墨、無復土。舉朝不解、以問東方朔。朔曰、「臣愚、不足以知之。可試問西域胡。」帝、以朔不知、難以移問。至後漢明帝時、外国道人、入來洛陽、時有憶方朔言者、乃試以武帝時灰墨問

之。胡人云、「經云『天地大劫將盡、則劫燒。』此劫燒之餘。」乃知朔言有旨。（『說郛』一二〇卷本、卷六〇）  
 実はこれと全く同じ話がやはり志怪小説である『搜神記』卷十三にも見える。陶宗儀が『決疑要注』輯佚に当たって『搜神記』の文章を誤入した、もしくは逆に明の胡應麟が『搜神記』輯佚時に『決疑要注』のそれを誤入した可能性も無論ある。しかし、さらに同じ文章が『初学記』卷七では東晋・曹毗の『志怪』佚文として引かれること、加えて先述の、髦頭の義をめぐる『決疑要注』佚文、また『続齊諧記』にも収める曲水の義をめぐる摯虞の議論を念頭に置  
 くなら、この場合、同じ劫火の余塵の話が『決疑要注』と『搜神記』、両者に収められていたと考えることができる。思うに両晋代、この伝承が東方朔の外伝などとして人口に膾炙しており、それを摯虞は何かの縁起を説くに当たって引用し、また干宝はそれを『搜神記』に輯録したのではなからうか。『決疑要注』が当時の志怪小説とも取材源と関心を共有したこと、更に言えば両者に同じ時代の精神が底流していたことを、ここから推測することも許されよう。同じ観点から、やはり『說郛』輯本にのみ見える次の『決疑要注』佚文にも注目したい。

（t）辛繕、嘗隱居華陰、光武徵不仕、至有大鳥、高五尺、五色備舉而多青、棲繕槐樹、旬時不去、弘農太守以聞、詔問百僚、咸以爲鳳、太史令蔡衡對曰、「凡象鳳者有五、多赤色者鳳、多青色者鸞、多黃色者雛、多紫色者鶴、多白色者鵠。此鷄多青色、乃鸞、非鳳也。」上善其言。

ほぼ同じ文章が、『太平御覽』卷九一五、九一六に同じ摯虞の『三輔決録』注として引かれている。これも陶氏の誤録として片付けるよりは、『決疑要注』『決録』注いずれにせよ、摯虞がこうした博物学的関心を持っていたことの現れ、と見るべきであろう。そして、そうした関心が直接には師の張華や皇甫謐らに由来するであろうこと、<sup>(10)</sup>さらに広くは、同時代の知的環境がそこに色濃く影を落としていたことを、推測してもよいであろう。

## おわりに

冒頭に述べたように『決疑要注』は六朝から唐代に至るまで広く読まれ、『宋書』礼志に引かれるように、当時の礼学家にも影響を与えてきた書物であつたらしい。同書が泰始新礼の注解としての性格を持っていたこと、そして泰始礼が大唐開元礼に至るその後の礼典編纂に大きな影響を与えたことを思えば、それは当然でもあろう。同書における歴史主義的傾向は、後漢・胡広の『漢官解詁』以来の傾向を継承するものであり、また志怪小説にも通ずる方外への博物的関心は、摯虞の師の皇甫謐や張華の学術的影響であらうとともに、後漢末の応劭『漢官儀』に現れ始めていた傾向を承け、それを展開させたものでもあつた。横軸で見ると、それは同時代の政治・社会上の風潮への鋭い危機意識とともに、当時の知的関心の趨勢を強く反映したものであつた。いわば同書は、後漢以来の職官儀注書の系譜の上に、それを魏晋時代の政治・社会・文化的状況に応じつつ発展させたものと言える。後漢の職官儀注書がそうであつたように、『決疑要注』もすぐれて同時代的な問題意識と文化潮流の産物であつたことを改めて強調して稿を終えたい。

注(一) 摯虞の文学理論については興膳宏『摯虞『文章流別志論』攷』(同氏『新版 中国の文学理論』清文堂出版、二〇〇八年、所収)に詳しい。また摯虞に関する専論ではないが、佐竹保子『西晋の出处論』(『日本中国学会報』第四七輯、一九九五年)、井波陵一『寄る辺なき時代に』(富谷至編『江陵張家山二四七号墓出土漢律令の研究』朋友書店、二〇〇六年、所収)が摯虞について比較的詳しく論ずる。

(二) 鄧国光『摯虞研究』(学衡出版社、一九九〇年)は摯虞の生平と交流、思想、学問と文学について詳述しており、目

下、摯虞に関する唯一の專論であろう。但し『決疑要注』についてはごく簡単に触れられるに過ぎない。

- (3) 泰始律令に関する專論は多いが、代表的なものとして堀敏一「晋泰始律令の成立」(原載『東洋文化』六〇号、一九八〇年、のち同氏『律令制と東アジア世界』汲古書院、一九九四に再収)など。

- (4) 六朝隋唐における五礼制度の發展、その中における泰始新礼の画期的意義については、梁満倉『魏晋南北朝五礼制度考論』(社会科学出版社、二〇〇九)が詳論する。

- (5) 興膳氏注(1) 前掲論文。

- (6) 拙稿「胡広『漢官解詁』の編纂―その経緯と構想―」(『史林』八六卷四号、二〇〇三年)。

- (7) 鄧氏注(2) 前掲書。

- (8) 拙稿「応劭『漢官儀』の編纂」(『関西学院史学』第三三号、二〇〇六年)。

- (9) 牟潤孫「論魏晋以来之崇尚談辯及其影響」(『注史齋叢稿(增訂本)上』中華書局、二〇〇九年、所収)。

- (10) (b)、(e)、(n)の佚文が一部、張華『博物志』(『漢魏叢書』所収)を引くことも、張華の摯虞への影響を傍証する。

(補注) 本邦残存典籍には、中国の伝世文献に見えない『決疑要注』佚文が二条残されている(新見寛編、鈴木隆一補『本邦残存典籍による輯佚資料集成』京都大学人文科学研究所、一九六八年)。辻正博氏のご教示による。